

事例③

留学を組み込んだ選抜コースを設置

出願時のエントリーで
意欲の高い学生を引き寄せる

広島修道大学

広島修道大学は、自学の教育理念に則したグローバル人材育成に取り組んでいる。

特に留学と就業体験を組み合わせた副専攻型プログラム「グローバルコース」は、

出願時にエントリーを求めることにより、留学に意欲的な学生を集めることに成功している。

選抜された同コースの学生を核に、多文化交流体験が可能な環境づくりや

留学生と共に学べるカリキュラムの導入準備など、学内の国際化を推進している。

海外での学びを
地域に生かす人材の育成

広島修道大学は創設以来、地域社会の発展に貢献できる人材の育成に力を入れている。近年の急速なグローバル化への対応でも、「地球的な視野を持ち、地域に貢献できる人材育成」という教育理念に基づき、多彩な教育プログラムの開発と環境整備に取り組んでいる。

2014年度に導入された全学共通の副専攻型プログラム「グローバルコース」は、所属する学部での専門的な学修と並行して、英語と国際理解の科目を積み重ねる3年間のプログラム。2年次後期にはサービラーニングを含む半年間の海外留学が組み込まれている。留学先の学費（約40万円）は大学が負担する。主に国際交流基金の運用益から捻出しているほか、教職員から寄付も募っている。なお、渡航やホームステイの費用については自己負担となる。国際センター長の竹井光子教授は「留学を通して得たグローバルな視点や知見を地域に持ち帰って、そこで活躍できる人を育てることが大きな目的」と語る。

同大学は2015年11月現在、13か国・地域の29大学と交流協定を結んでいる。交換留学や短期・長期の海外セミナーを含め、年間約230人の学生を海外に派遣中だ。これら既存の海外留学プログラムと比べ、グローバルコースは入学後ではなく、出願時にエントリーを課す点に大きな違いがある。入学前から留学の意志を明確に持っている学生にのみ提供する特別なプログラムという位置付けだ。

実際、留学に対するモチベーションの高い学生を確保できている。「このコースがあったから受験したという学生も少なからずいる。本学への入学動機を高める要因であることは確か」と竹井教授は話す。留学中にボランティアなどの社会貢献活動に参加できることも、受験生から評価されているという。

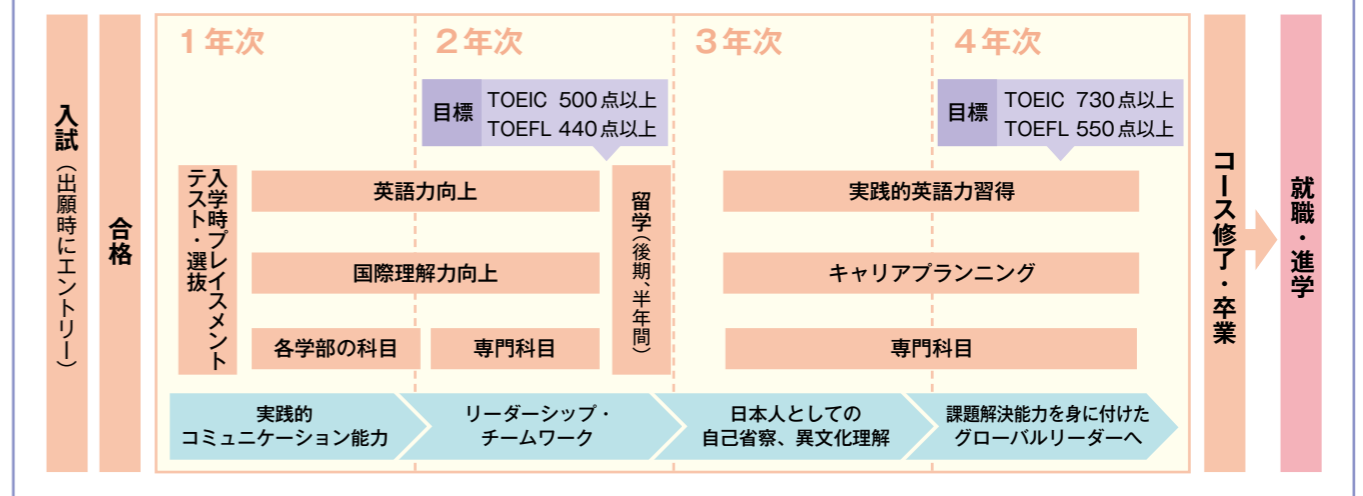
導入初年度は志願者全体の約1割に相当する724人がエントリーし、そのうち217人が入学した。英語のクラス分けのため、入学者全員にTOEICを使ったプレースメントテストを行い、上位30人（2016年度から40人）がグローバルコースに選ばれる。もっとも「プレースメントテストのスコアだけで選抜す

ることが最適かどうかという問題意識は常にある」（竹井教授）。

選抜にもれた学生に再チャレンジの機会はない。しかし、グローバルコースのガイダンスと同時に開催する留学説明会（例年約100人が参加）などを通して、各自の目的に合わせた留学プログラムを紹介するなど、適切なフォローをしている。また、希望者が全員登録できる副専攻型プログラム「地域イノベーションコース」では、2016年度からは一定の条件を満たした学生が海外で学べる「グローバル・イノベーションプログラム」を実施する計画だ。

グローバルコースに選抜された学生の入学時のTOEICスコアは平均で540点だが、留学直前までの1年半で平均120点以上伸びている。「大学生の英語の資格試験のスコアは、1年次の前期に大きく伸びるものの、その後は伸びが緩むのが一般的だが、本コースの学生には停滞がない。入学前から留学という目標を持ったことが学習のモチベーションとなり、スコアに表れている。強い目的意識・計画性を持って、留学の準備を自主的に進めることができる学生の集まりだと思う」（竹井教授）。

図表1 グローバルコースのカリキュラムイメージ

グローバルコースの
履修科目と評価方法

グローバルコースのカリキュラムは、「国際理解科目」（6単位以上）、「英語科目」（24単位以上）、「留学プログラム」（24単位以上）の3種類から成り、計54単位以上修得すると、コース修了証が授与される。

このうち、留学プログラムはコース専用科目だが、国際理解科目と英語科目は、各学部の開設科目および共通教育の英語科目の中から、グローバルコースの目的とレベルにふさわしいものが指定される。また、国際理解科目の中にも、入学直後に学ぶ「異文化理解」など、グローバルコース専用科目があり、報告会やディスカッションなどを行うホームルームのような科目も設けられている。いずれの科目も卒業要件単位数に含まれるが、所属学部や学科の必修科目などもあるため、グローバルコースの学生は他の学生よりも修

得単位数が多くなるという。

英語科目では、4技能全てのトレーニングを行う。半年に1度、学内でTOEICテストを受験して、力の伸びを確認する。ただし、同テストではリーディングとリスニングの能力しか測定できないため、4技能全てを測定できる外部検定試験の導入を検討しているという。

国際理解科目の教育効果については、人権の尊重や他国文化の理解、世界連帯意識の育成といった観点で作成される「国際理解測定尺度*（IUS2000）」を用いて評価する。グローバルコースの学生は、入学時点から一般学生よりも国際理解度が高く、学年進行とともに高まることが確認されている。

海外で働く経験を積む
サービラーニング

グローバルコースの2年次後期は、

* 鈴木佳苗、坂元章、木村文香、足立にわか、坂元桂「国際理解測定尺度の作成（1）」（1999年）に示された尺度を活用している。

半年間の留学プログラムに当てられる。2014年度入学1期生の2015年度留学先はアメリカ・オレゴン州ポートランド近郊のメルルハースト大学の附属機関であるパシフィックインターナショナル・アカデミー（PIA）だった。2016年度（2期生）からは、1989年からの協定校であるニュージーランドのクライストチャーチ工科大学（CPIT）も加える予定だ。留学中は全期間を通じてホームステイとなる。

プログラムの最大の特色は、英語研修に加えて、現地でのサービラーニングが含まれていることだ。約10週間の集中英語講座、約1週間のサービラーニング準備学習、約6週間のサービラーニングプログラムで構成される。学校や美術館・博物館、NPO、行政機関などで、インターンシップやボランティア活動を行う。

学生は、留学前に実習先の一覧から、自分の関心や目的に合った実習先を探す。最終的には、現地のコー

ディネーターと相談して決定する。実習先によっては要求される英語のレベルがほかより高いこともあり、集中英語講座での力の伸びなどを勘案する必要があるからだ。

ポートランドは、環境に優しい街づくりで知られ、その都市計画の一端に触れられる。また、クライストチャーチは、2011年2月の大地震を受けてさまざまな復興プロジェクトがあり、日本の地域活性化や被災地の復興に生かせるヒントも得られる可能性がある。竹井教授は「実習先での経験が帰国後の地域貢献につながることを期待している。本学の教育方針を体現するプログラムとして大きく発展させたい」と期待する。

帰国後は報告会を行い、英語の4技能の語学力の伸びを確認する。その後は、グローバルコースの英語科目と国際理解科目の履修を続けながら、「異文化コミュニケーション」などの科目を通して、学んだことをどのようにキャリアにつなげていくかを考えていく。留学を終えた学生と留学前の学生の交流なども行う。

グローバルコースに登録した学生の方向転換も時には見られる。コースではなく専攻分野を深めたいという学生や、集団ではなく単独で交換留学に挑戦したいという学生もいる。1期生で留学プログラムに参加したのは29人中20人だった。竹井教授は「学びの途中で学生に変化が起きるのは当然のこと。特に、より高い目標や自分がやりたいことに取り組む希望があれば、それを支援するのが大学の役割だと考えている」と話す。

日本人学生と留学生が共に学ぶ環境を構築

グローバルコースに続いて打ち出したのが「グローバルキャンパス」構想だ。2015年3月には、キャンパスの中心部に「協創館」を竣工。ここに留学や国際交流を担当する「国際センター」、主体的な学びをサポートする「学習支援センター」、地域連携を担う「ひろしま未来共創センター」を集約した。館内には外国人留学生と日本人学生の多文化・多言語交流スペース「iCafe」もオープン。「キャンパス内に疑似的な留学環境をつくりたかった」と竹井教授は話す。

同時に、一般学生と留学生の橋渡しをする学生集団の組織化も行った。学外の留学生寮に住み込んで留学生の世話をする「レジデントアシスタント」や、交換留学生の日常生活や学修をサポートする「バディ」、iCafeでの交流をサポートする「iCafeピア」などだ。竹井教授は「グローバルコースの学生には積極的な参加を求めている。多文化交流のけん引役を担ってくれることを期待している」と話す。

現在、年間130人以上の外国人留学生を受け入れており、これを増やす計画もある。短期間の日本語研修コースへの参加者を各国から積極的に受け入れ、常に多様な文化的背景を持った学生がいるグローバルキャンパスの実現をめざす考えだ。

2017年度からは「グローバルカリキュラム」を導入する。日本人学生と外国人留学生が共に学び合うカリキュラムの編成作業が進行中だ。これに先

図表2 2017年度実施予定の国際センターの改革内容

国際交流部門+国際教育部門

- 教育機能の強化

センター所属教員の配置

- 専任教員/契約教員/非常勤教員

センターカリキュラム (グローバル科目)の構築

- 留学生教育科目(日本語・日本研究)
- 留学支援教育科目(事前・事後学習)
- 国際共修科目(多文化交流プロジェクト)

立ち、同カリキュラムに基づく授業を実施する国際センターの改革も構想している。留学生の派遣と受け入れを担当する国際交流部門に加え、国際教育部門を新設。センターに専任教員を配置する。さらに、外国人留学生の日本語教育と日本研究の指導をする「留学生教育科目」、日本人学生の留学準備・事後学習やキャリア形成などを支援する「留学支援教育科目」、留学生と日本人学生が共に学ぶ「国際共修科目」などを、全学共通のグローバルカリキュラムとして開設する計画だ。

このほか、グローバルコースと地域イノベーションコースの学修内容を横断的に学ぶことができる新学部・学科の設置構想も動いている。竹井教授は「グローバル人材の育成には、教育が担う部分と体験が担う部分があり、それらをうまく連携させていくことが重要。グローバルコースの教育内容の充実に加え、海外のみならず学内でも異文化交流ができる環境をさらに充実させ、教育理念の実現に向けて努力していきたい」と抱負を語る。